

10周年記念の集いに参加して

安達美菜

10月21日の10周年記念の集いは多くの方が参加され、会場は賑やかだった。

ドキュメンタリー映画「踊りの記憶」は、パラワン州北部のタグバヌア民族、ヌエバビスカヤ州のブグカロット民族とそこに移住したイゴロット民族、ミンダナオ島アポ山周辺に住むマノガ民族が、先祖伝来の土地で外部からの開発と戦いながら文化を継続・再生していく様を描いていた。登場する長老や、若きリーダーは誇りと自信に満ち、彼らが暮らす湖や山は美しかった。ビラーンや日本のアイヌ民族など先住民族がいずれも、より大きな権力の欲望の犠牲になってきた歴史を再認識させられると同時に、希望も与えてくれた。

北部ルソンで活躍される IYAMAN の事務局長、松本栄子さんとスタッフのジェーン・ニギワスさんのお話もとても興味深かった。驚いたのが、現地スタッフで日本人は松本さん1人ということ。農業や教育、医療などの支援、指導をされているのだが、現地スタッフが育っていて自分達で計画、運営などを進めていた。会議、議論の仕方から研修をしたり、大学卒業生を地元の教師に迎えることで子供達の学習意欲を高めたり、1500～2000mの高地に適した栽培物の指導、有機農法も取り入れていた。農業で生活するのは難しい。大学卒業生の8割は海外で働く事を望むなど、ビラーンと共通した問題はある。ジェーンさんもイゴロット民族の人々の暮らし、長老を敬う伝統、また、高地に暮らす為、サルに近いという蔑視があり、尾を見ようとすると人がいて心を傷



IYAMAN 松本事務局長と民族衣装を着たジェーン

つけられる事などを話して下さった。HANDSも素晴らしい成果を挙げているが、自立という事がどうしても難しい。グローバリゼーションから逃げられない事が一番大きな原因だが、松本さんの「NGOはいつか去るべきもの」という言葉が強く印象に残った。

Congratulations!

アガリン・サラ・長瀬

10周年にお招きいただきましたが、当日は残念ながら仕事があるので伺えません。

ミンダナオ支援、特に偏見や差別によってフィリピン社会から疎外されている先住民族 Lumad や Moro に対する HANDS の活動が10周年を迎えたことに対してお祝い申し上げます。これからも引き続いて、このような抑圧され開発の犠牲になっている人々とともに歩まれますように願っています。いつか、ともに勝利の喜びを味わうことができますように。Mabuhay Kayong Lahit!

(文責・山崎)



ナプサリータ・サラ

HANDS 会員、スタッフ、友人、ご家族の皆様にも10周年のお祝いを申し上げます。

私たちは3年前ぐらいまではスタッフも2人しかいなくて身動きがとれないでいましたが今は違います。HANDS のパートナーとして、PIHS が来るのを待っている村に活動を広げることができるようになりました。保健ボランティアの研修も実施しました。

PIHS スタッフ、モロ民族の住民とともに感謝申し上げます。これからも一緒にがんばりましょう。

(文責・山崎)

アガさんは在日フィリピン女性の相談窓口 KAFIN 代表であり、また全国から講師として招かれるなどミンダナオ問題の正しい理解のため活躍されています。私たちも講演をお願いしたりモロの村の事業その他で助言をいただいています。PIHS 代表のナプサさんはアガさんの妹で、事業管理他看護師として指導や治療に当たっています。